

ヤン・ポトツキと『サラゴサ手稿』

畑 浩一郎

### **Jean Potocki and his *Manuscrit trouvé à Saragosse*** ---

This study presents the life of Jean Potocki (1781-1815) and his novel, *Manuscrit trouvé à Saragosse*, in the context of recent research results.

Born in Poland, which will soon disappear as a result of a Russia-Prussia-Austria division agreement, Potocki experienced many vicissitudes. In vain, he wished to be recognized first as a historian and then as a politician. Having traveled extensively, he left many charming travel stories.

However, posterity remembers him for his novel, *Manuscrit trouvé à Saragosse*. He began writing it merely as a pastime, but he continued to rework it up until his suicide. Researchers have recently discovered two different versions of this novel, one of which is ascribed to 1804 and the other to 1810. The versions are two contrasting faces of the same work, with the first being abundant, exploded, and unbridled, while the second is organized, measured, and orderly.

## はじめに

ヤン・ポトツキ（一七六一～一八一五年）という人物の輪郭を定めることは難しい。たとえば『十九世紀ラルース百科事典』（一八六六～一八七七年刊行）を開いてみると、そこにはまず「歴史家、考古学者、旅行家」という記述があり、その後には彼の生涯についての説明一間違ひも多しを挟んで、ポトツキが残した数々の歴史に関する著作、年代記、旅行記などのタイトルが列挙されている。最後に『サラゴサ手稿』という小説について簡潔に言及がなされ、後にふたつに分割されてパリで刊行されたこと（事実誤認）、また第三者がそれを剽窃してスキャンダルになったことが語られている。いずれも現在の目からポトツキの生涯とその仕事を見たとき、力点の置かれ方に違和感が残る。

こうした違和感はおそらく、彼が夢見た人生と彼が実際に送った人生との間に乖離があることから生じている。確かにポトツキは生涯にわたって歴史学という学問に取り組み、この分野での成功を望み続けていた。この時代のフランス最大の碩学のひとりバルテルミ神父をして「彼（ポトツキ）に匹敵するほどの人は未だかつていない<sup>1</sup>」とまで言わしめるほど豊かな学識を持ち、古代語を自在に読み解きながら長年に渡って歴史研究に取り組んでいる。また彼が行なった数々の旅行も、実地での情報収集という側面が強い。ただしこのように多くの労力を費やして残された彼の数多くの歴史に関する著作に、今、目を向ける人はいない。

またポトツキは政治の分野で活躍することをも願っていた。まずは祖国ポーランドの危機に愛国者として、ポーランド消滅後はロシア政府の外交アドバイザーとして名を挙げることを夢見ていたのである。だがいずれも

<sup>1</sup> Filippo Mazzei, *Memorie della vita e delle peregrinazioni del Fiorentino Filippo Mazzei*, éd. Alberto Aquarone, Milano, 1970, p. 427. Cité par François Rosset et Dominique Triaire, *Jean Potocki, biographie*, Flammarion, Paris, 2004, p. 319. (原文イタリア語)

願いは叶わない。ポーランド分割の危機にあつては、しばしば国王スタニスワフ・アウグストの足を引っ張ることになり、またロシア皇帝アレクサンドル一世直々に自分を登用してもらうよう手紙を書くが、こころよい返事はない。失意のポトツキは晩年、ウクライナの自邸に閉じこもるようになる。

ポトツキの生涯は必ずしも輝かしいものではなかった。むしろ失意に次ぐ失意の連続であったと言った方がよい。彼の名前が今日にまで伝わるのは、彼が自信を持って世に出し、それによって成功を夢見た歴史学の分野の著作を通じてではない。また誰よりも精通していると自負していたコーカサス、シベリアの運用について政治的手腕を振るおうとしたためでもない。皮肉なことに、それは最初はおそらく単なる手すさびとして書き始められ、その後、何度も中断を挟みながら長年にわたって書き続けられた一編の小説によるのである。この小説『サラゴサ手稿』こそ、ヨーロッパ文学に独自の地位を打ち立てる傑作となり、ポトツキは何よりもまず文学者として後世に名を残すことになるのである。

『サラゴサ手稿』もまた、その作者の人生と同様、数奇な運命をたどった。その執筆の状況、ならびに刊行までの経緯は複雑極まりない。本稿の目的はそれゆえひとつに絞られる。それはポトツキと『サラゴサ手稿』について、最新の研究に基づく実証的な情報を提供することにある。これまでわが国においては、この作者についても、またその作品についてもほとんど知られてこなかった。わずかに一九八〇年に、国書刊行会の世界幻想文学大系の一環として『サラゴサ手稿』の一部が翻訳・出版されているのみである<sup>2</sup>。ただし後述のように、この翻訳の定本となったのは、一九五八年にガリマール社から刊行されたカイヨワ版であり、紹介されたのも小説全体の四分の一のみにとどまっている。小説の全貌は、作者の生涯とともに、日本ではいまだ霧に包まれている。その霧を払い、歴史に翻弄され続けたポトツキ

<sup>2</sup> 『サラゴサ手稿』 工藤幸雄訳、世界幻想文学大系：国書刊行会、一九八〇年。

という人物と、彼が残した『サラゴサ手稿』という不可思議な小説がたどった歴史を明らかにすることを本稿では目指していく。

## I ポトツキの生涯

### I-1 生い立ち

ヤン・ポトツキは一七六一年、現ウクライナのピコヴで生まれた。ポトツキ家はポーランドでも有数の大貴族であり、その起源は十四世紀にまで遡る。この時期にヤンの祖先はドニエストル川上流、ポドリヤ(ポジージャとも呼ばれる)の地に住み着いたのだが、ここはまさにオスマン・トルコとの国境地帯であり、代々のポトツキ家の当主は押し寄せるトルコ軍とたびたび干戈を交えている。後にヤンがその著作で見せることになる極めてスケールの大きな世界観、文化の違いに対する驚くべき柔軟さは、ヨーロッパとオリエント、キリスト教圏とイスラーム圏の端境に位置する、この祖父伝来の地の特殊性に由来するのかもしれない。

ヤンの父ユゼフは、十八世紀後半のポーランド特有の難しい政治局面に対峙しなければならなかった。ロシア、プロイセン、オーストリアといった大国に囲まれたポーランドは、国王スタニスワフ・アウグストの元で独立を維持すべくさまざまな改革を行うが、シュラフタと呼ばれる貴族たちの足並みは揃わない。そればかりか彼らは国王の廃位をもくろみ、同時に影響力を強めるロシアに対抗すべくバル同盟を結成するにいたる。ユゼフはあるときは親ロシア派、またあるときは親プロイセン派と、その政治的な姿勢は定まらない。ただ事業の面ではそつがなく、ユゼフの領地は東西に三百キロメートルに及び、数万人の農奴を抱えていた。彼はポーランドで最も豊かな、すなわちヨーロッパで最も豊かな貴族の一人であった。

一方、母のアンナ＝テレサはポーランド随一の美女とうたわれ、国王スタニスワフ・アウグストの母がぜひ息子の妻にと望んだような人物であった。ポーランド王妃になる可能性もあったアンナ＝テレサはしかし、ポー

ランドでの生活にあまり馴染めなかったようだ。フランスで教育を受けた彼女は、ユゼフとの結婚後もパリやウィーンの社交界を主な活躍の場としている。とりわけパリでは、女流作家であり、後に国王ルイ・フィリップとなるヴァロア公の養育係としても知られるジャンリス夫人と親交を結んだ。そのジャンリス夫人の紹介で、アンナ＝テレサはフランス王家のごく親しい集まりにまで参加を許されている。

こうした超一流の名家に生まれたヤンは、十三歳になるとひとつ違いの弟セヴェリンとともに、教育のためにスイスに送られる。以後三年にわたって、兄弟はヌーシャテル湖のほとりで、プロテスタントの牧師からフランス語による教育を受ける。これがポトツキの言語アイデンティティを決定づける契機となる。彼は今後もつばらフランス語でものを考え、フランス語で執筆を行うことになる。後に歴史研究を行う必要性から、また言語そのものに対する関心から、ポトツキはイタリア語からドイツ語、スペイン語、トルコ語にいたるまでさまざまな外国語を身につけることになる。それでも彼の根幹的な思考を支える言語は、最後までフランス語であり続ける。

学業を終えたポトツキはオーストリア軍の将校となり、バイエルン継承戦争に参加する。ただしここでは大きな戦闘は行われず、兵士たちはただ食糧とするじゃがいもを掘り出すことに明け暮れた。よってこの戦争は、別名「じゃがいも戦争」と呼ばれる。一七七八年にはマルタ島に渡り、地中海を荒らすバルバリアの海賊と戦っている。『サラゴサ手稿』にも「トレドの騎士」をはじめ、何人かのマルタ騎士団員が登場する。この騎士団は、かつて聖地に赴くキリスト教巡礼者たちを保護するために設立されたものだが、時代を経てそうした役割は薄れていく。それでも騎士団に入団を望む若者たちは、地中海の海賊と戦うことで、比喩的に「巡礼者保護」を行うことを求められるのである。ポトツキは一七八一年に無事に騎士として迎えられている。

## I-2 政治の時代 フランス革命とポーランド分割

二十四歳になったポトツキは、ユリア・ルボミルスカと最初の結婚をする。ユリアの母は、国王スタニスワフ・アウグストの本いここに当たり、またユリア自身は、近代ポーランド史において重要な役割を果たす大貴族アダム・イェジィ・チャルトリスキの本いここに当たる。夫妻は新婚生活を始めるのにあたって、フランスのパリを選ぶ。パリでは当代きっての著名人たちと交友を結ぶが、とりわけヤンはバック通りのスタール夫人宅に頻繁に足を運んでいる。スタール夫人は後に手紙で、ポトツキのことを「愁いに沈む二枚目」(beau ténébreux)と呼んでいる<sup>3</sup>。これはスペインの騎士道物語『ゴールのアマデイス』の主人公のことで、忠実な恋人でありながら放浪を続ける騎士を意味する。つまりスタール夫人は自分を恋人オリアーナに、ポトツキをアマデイスになぞらえることで、旅ばかりしていて、一向に自分の家に寄りつかないポトツキのことを親しみを込めて咎めているのである。

一七八八年一月、ウィーン滞在中のポトツキは、プロイセン軍がポーランド侵攻の準備をしているという報を耳にする。すでに一七七二年、バル同盟の崩壊と共に、第一次ポーランド分割が行われている。急ぎワルシャワに舞い戻ったポトツキは、祖国防衛のための固い決意を固める。若き日のポトツキは奇行で知られ、国王スタニスワフ・アウグストの絶えざる心配の種となるが、この時もまた例外ではない。彼は前夜まで優雅に揺らしていたフランス風の巻毛を落とし、大刀を佩くと、コザックの伝統衣装をつけて、国王へ謁見を求めるのである。そして国王に親書を渡すのだが、その内容は「プロイセンと交戦もやむなし」という過激なものである。ポトツキはこの親書の写しを多数作成し、若い貴族たちに配布する<sup>4</sup>。宮廷はそのため大混乱に陥る。ポトツキはその後も、ポーランドの自由を守る

<sup>3</sup> Voir Jean Potocki, *Œuvres*, éd. François Rosset et Dominique Triaire, Peeters, Louvain., vol. V, 2006, p. 35.

<sup>4</sup> 《Ne Quid Detrimenti Republica Capiat》, in *Œuvres*, éd. cit., vol. III, 2004, p. 249-253.

べく文書を発表するが、そのうちのいくつかは国王自身から発行禁止処分を受けている。この無分別な若い貴族の言動が隣国の不興を買うのではないかと懸念されたのである。

その後も国庫に自らの財産の一部を寄付するなど、ポトツキの愛国的行為は続くが、この時期の彼の政治活動の頂点をなすのが、いわゆる四年セイム（全国議会）への立候補である。彼はポズナン選挙区から出馬し、八つの議席を四〇人の候補者で争う中、見事三位で当選する。この議会は一七九一年に五月三日憲法を制定することになるが、これはヨーロッパで初の、そして世界でもアメリカ合衆国憲法に続く第二の成文国民憲法である。ただしこの憲法が採択されたとき、ポトツキは遠くスペインのマドリッドにおり、実際の投票には参加していない。さらに言えば、二年間の議員生活において、ポトツキは一度も演壇に立って演説を行うことはなかった。その理由を、国王スタニスワフ・オーギュストはとある書簡で明かしている。つまりポトツキはポーランド語が不得手で、議会で演説を行えるだけの語学力を持ち合わせていなかったのである<sup>5</sup>。故国ポーランドに対する愛国心に燃えながら、その言葉を十分に話すことができないという事態に、ポトツキのディレンマを見てとることができる。

一七九〇年の秋、ポトツキは再びパリに向かう。革命まっただなかのフランスの首都は四年前に目にした姿とはおおよそ変わっていた。ポトツキはミラボーによって、いつでも好きなきに憲法制定議会を見学することができる手筈を整えてもらう。またジャコバン派の集いへの出入りも認められている。ポーランドの大貴族が、急進的な革命思想に触れて心穏やかでいられるのかという疑念はあくまで後代のものでしかない。ポトツキはラ・ファイエットの邸宅に食事に出かけ、さまざまなサロンに顔を出し、フランス革命というこの未曾有の事件をつぶさに観察できることを心から喜んでいる。

---

<sup>5</sup> Lettre de Stanislas August à Phillippo Mazzei du 30 octobre 1790, citée dans Potocki, *Œuvres*, éd. cit., vol. V, p. 22-23.



一七九二年、ロシア軍はポーランド国境を越える。ポトツキもリトアニア方面で戦闘に参加する。だが敵の勢力は圧倒的で、ポーランド軍は各地で撤退を余儀なくされる。国王スタニスワフ・オーギュストは降伏し、ここに第二次ポーランド分割が行われる。ポトツキは国王に慰めの手紙を書き、同時に自分はもう今後政治には関わることはないと言明する<sup>6</sup>。ポトツキの政治活動の第一期の終焉である。

### I—3 歴史家として

一七九四年に起きたコシチュシコの蜂起についても、ポトツキはほとんど関心を払わない<sup>7</sup>。蜂起の失敗によって、第三次ポーランド分割が行われ、地図上からポーランドという国が消滅しても、やはり無反応である<sup>8</sup>。かつて燃え上がった愛国心は、今や完全に冷え切ってしまったかのようである。ではこの時期の彼は何に関心を寄せているのか。歴史についてである。

実はポトツキは早くから歴史、あるいは年代記に対して強い興味を見せていた。とりわけスキタイ、サルマタイといった黒海沿岸にかつて住んでいた民族、さらにその末裔にあたるスラヴ民族の歴史については三十年近い歳月をかけて、熱心に調査と研究に取り組んでいる。この分野で彼が執筆した著作は、未刊のものも含めて二十点近くに及ぶ。そして彼が生涯にわたって強く望んだのは、歴史家として認められたいということであった<sup>9</sup>。一七九六年にはロシア皇帝エカテリーナ二世が自らその著作を手にとってくれ、この分野での研究にさらに励むようにとのねぎらいの言葉を送ってくれたという本人の証言が残っている<sup>10</sup>。

<sup>6</sup> Lettre à Stanislas Auguste (juillet 1792), *ibid.*, p.30-31.

<sup>7</sup> 「クラクフの同盟も長くは持たないと思います。」 Lettre à Henri Lubomirski du 8 mai (1794), *ibid.*, p. 37.

<sup>8</sup> それどころか、ポトツキはポーランドの復活についてむしろ辛辣な言葉を残している。「すぐにウクライナに行って、ポーランドの一件という常に蘇るヒドラの首を何本か落としてきます。」 Lettre à Platon Alex. Zoubov du 15 octobre 1796, *ibid.*, p 49.

<sup>9</sup> 「この国でいくらか認められるためには、僕のスラヴの古代についての仕事以外に手段はないし、これからもないのです。」 Lettre à Stanislas Félix Ptocki, du 1<sup>er</sup> décembre 1795, *ibid.*, p. 45.

<sup>10</sup> Voir *Œuvres*, éd. cit., vol. III, p. 135. また次の箇所注5も参考。 *Œuvres*, éd. cit., vol. V, p. 49-50.

それにしてもなぜスキタイ、サルマタイ、スラヴ民族なのか。ポーランドという国が消滅した段階で、ポトツキの領地はロシア領に組み込まれている。後に見るように、彼は今後ロシア宮廷に仕え、ロシア人として生きていくことになる。ロシア・スラヴ民族の歴史について研鑽を積むことで、ロシア政府高官の共感を得ようとしたのだろうか<sup>11</sup>。むしろそこに見るべきなのは、ポトツキの自らのルーツに対する深いこだわりである。

「国民」という概念はフランス革命を経て、ようやく形を取るようになっていく。すなわちポトツキの生きた時代にはまだ堅固に根づいていなかった考え方である。ロシア侵攻後、「ポーランド人」という意識が、ポトツキの頭から急速に消え去るのもそのためである。だからと言って、数世紀にわたるポトツキ家の輝かしい家系図も、貴族階級そのものがかつての特権を次々と失っていく時代にあっては、自らのルーツを保証してくれるよすがとしては不十分である。ポトツキは国家や家名といったものよりも、むしろ民族の血にこそそのよすがを求める。この観点に立てば、ポーランドもロシアも同一であり、ラテン民族やゲルマン民族に伍するひとつのグループを形成することになる。そしてスラヴ民族は黒海のほとりから起こったと信じられていた。ポトツキは自らの属するこの民族の起源をできる限り遠くまでさかのぼることで、自分の拠って立つ基盤を見出そうとしたのではないだろうか。ここにもまた現代的な考え方では捉えきれない、ポトツキのアイデンティティの特殊性が見て取れる。

#### I-4 ロシア政府との関わり

一八〇四年、アダム・イエジィ・チャルトリスキが、ロシア政府の外務大臣となる。先述の通り、ポトツキの最初の妻の本いここにあたる人物である。翌年、彼の口利きで、ポトツキはサンクトペテルブルクに招聘さ

---

<sup>11</sup> 一八〇二年に刊行されたポトツキの著作『ロシア諸民族の初期の歴史』には皇帝アレクサンドル一世への献辞が付されていたが、おそらくそれが契機となって、ポトツキはアレクサンドル一世の私設顧問に任じられる。Voir *Œuvres*, éd. cit., vol. V, p. 90.

れ、ロシア外務省のアジア部門に配置される。ポトツキの政治活動の第二期の始まりである。この時期のポトツキの仕事は二種類に分類される。ひとつは「アジアシステム」(Système asiatique)の構築である。これはロシア帝国が東方にて展開すべき政治・経済・軍事活動についての立案であり、ポトツキによれば、皇帝アレクサンドル一世自らが彼に命じた任務であるという<sup>12</sup>。もうひとつは「北国新聞」(*Journal du Nord*)の編集である。これはロシア政府の方針を広くヨーロッパ諸国に伝える目的で発行される御用新聞で、そのため記事はすべてこの時代のヨーロッパの公用語であるフランス語によって書かれていた。フランスの「モニトゥール」紙のロシア版とも言える。

ポトツキはかつて広くコーカサス地方を旅し、また後に触れるようにモンゴルのウランバートルにまで足を伸ばした経験を持つ。ロシアの東側地域の事情については誰よりも精通しているという自負が彼にはあった。そこで彼が提案するのは、この地域のさまざまな遊牧民族と協調して中国までの通商路を開くことである。現在、インド、ないし中国との交易は、海上輸送を行う英国とフランスが掌握している。ロシアは陸路を整備することで、これらの国々に対抗すべしというのがポトツキの論の趣旨である。

だが現状ではコーカサスやシベリアに住むさまざまな民族との関係はうまくいっているとは言い難い。その理由は何よりも彼らの言語、風習をロシア人が知らないことにある。したがってロシアはオーストリアに倣って<sup>13</sup>、東方アカデミーを設立し、これらの民族について学術的な研究を始めなければならない。また同時に、彼らと交渉できるような語学力を持つ通訳の養成にも努めなければならない。場合によっては、自分がその任を負ってもよい。そう考えるポトツキは、チャルトリスキやその後任の外務大臣たち、果ては皇帝アレクサンドル一世その人にまで、何度も誓願を出

<sup>12</sup> Voir la lettre à Nikolai Petr. Roumiantsev, (4 décembre 1807), in *Œuvres*, éd. cit. vol. V, p. 218.

<sup>13</sup> オーストリアの東洋言語アカデミーは、マリア・テレジアの命によって、一七六九年、ウィーンに設立されている。

し続ける。だが結局彼の願いは叶わない。

「北国新聞」の編集はポトツキにとって大きな負担であった。御用新聞である以上、自由に意見を書くことができるわけでもなく、常に時の外務大臣アンドレイ・ブドベルクの厳しい検閲にさらされる。この時期にポトツキとブドベルクの交わした数多くの書簡を見ると、ポトツキの苦悩がよくわかる。ブドベルクは気に入らない話題や文章については丸々削除せよと遠慮なく指示してくる。それに対しポトツキはほとんど卑屈と言ってよいほどの従順さで応じるのである。

また「北国新聞」におけるポトツキのフランスに対する態度は微妙である。かつてパリで彼を歓待してくれたフランス人たちに対しては含むところはないが、権力の篡奪者ナポレオンに対しては敵意を剥き出しにしている。それはナポレオンと刃を交えるアレクサンドル一世の御用新聞の編集長であれば当然の態度でもあるのだが、他方で、皇帝という権力のよりどころを厳密に突き詰めていくと、ナポレオンへの批判は、アレクサンドル一世その人への誹議にも通じかねない危険性をも秘めている。したがって言葉は慎重に選ばねばならない。さらにポトツキの立場を微妙なものにするのは、この時期サンクトペテルブルクに押し寄せていたフランス人の亡命貴族たちの存在である<sup>14</sup>。何しろ亡命中のルイ十八世自身がこの新聞を購読し、執筆者たちに感謝するようにと大臣に命じているほどである<sup>15</sup>。それほど「北国新聞」はフランス人亡命貴族たちの間で熱心に読まれていた。彼らは時として記事に容赦なく文句をつけ、ポトツキを悩ませることになる。

だが一八〇七年にティルジットの和約が結ばれると、事態は激変する。ロシアとフランスとの間で講和が結ばれ、かつての敵は今日の味方となるのである。これまで皇帝ナポレオンを激しく攻撃していたポトツキはした

<sup>14</sup> その中には『サンクトペテルブルク夜話』（一八二一年、死後出版）の著者ジョゼフ・ド・メストルがおり、ポトツキとは何度も書簡を交わしている。

<sup>15</sup> *Jean Potocki, biographie, op. cit., p. 371.* この時期、ルイ十八世はクールラント公国の首都イェルガヴァ（現ラトビア）に滞在中だった。

がって立場を失う。ポーランドにはワルシャワ公国が建国される。今やロシア皇帝に仕える身にあつては、今さらポーランドが復活したと言われても彼になすべきことはもはやない。ましてやそれがナポレオン率いるフランスの保護下に置かれるとなれば、なおさらのことである。身の置き場をなくしたポトツキは「北国新聞」編集長の地位から身を引き、故郷のポドリヤに戻る。以降、ポトツキはほとんどこの地方から出ることはない。ロシアでの三年間にわたる宮づとめは、結局ポトツキに失意しかもたらさなかつた。

### I—5 旅行家として

ポトツキの生涯は耐えざる旅の連続である。この点について、ある研究者が興味深い指摘を行なっている<sup>16</sup>。それによると、ポトツキが生まれ、そして亡くなったポドリヤを中心として、半径三、四千キロメートルの円を描けば、彼の旅の行程の概要を示すことができるというのである。すなわち西から南回りにロンドン、リスボン、モロッコを経て、北アフリカ沿岸、エジプト、コーカサス、サンクトペテルブルク、そしてモンゴルのウランバートルが東側の端となる。ウクライナに蟄居した晩年の数年を除けば、ポトツキはこの円周の中を常に動き続けている。ポーランド、スイス、オーストリア、イタリア、スペイン、オランダ、マルタ島、フランス、プロイセン、ロシア、彼が足を踏み入れなかつたヨーロッパの国はほぼ存在しない。

ポトツキはこれらの旅のいくつかについて、記録を残している。残念ながら失われてしまったものもあるが、これらの旅行記は間違いなく今日にも読み継がれる魅力を持っている。その理由は三つある。ひとつには、旅行者の行動の柔軟性が挙げられる。モニュメントや記念碑など町の見所をたどるのではなく、ただそこにいるという喜びを味わうためだけに

<sup>16</sup> François Rosset et Dominique Triaire, 《Présentation à Jean Potocki *Voyages*》, GF-Flammarion, Paris, 2015, p. 8.

入り組んだ小道を歩きまわり、また最も奥まった地域でわざと迷子になる。「計画を立てないという計画だけにしたがって<sup>17)</sup>」(『オランダ旅行記』一七八九年) 町を彷徨い歩き、普通の旅行者が入り込めない場所にも、現地の人と執拗に交渉して潜り込んでいく。そのような彼の観察が、通常の旅行記作家のものとはかけ離れたものとなるのは当然である。ポトツキは何度となく他人の旅行記の記述の平凡さを批判している。「旅行者は物事を観察するのに、自分の国から持ってきたメガネしか持っていない。そのレンズを訪れた国で作り直すということを怠る。だからあれほど酷い観察が生まれるのだ<sup>18)</sup>」(『モロッコ帝国旅行記』一七九二年)

またただ目にしたものを報告するだけではなく、ポトツキは旅行記にフィクションを織り込んでいく。彼が初めて出版した著作である『トルコエジプト旅行記』(一七八八年)においてすでにそれは見られ、旅行中に母に宛てた手紙という形を取る旅行記に、彼自身がコンスタンチノーブルで耳にした講談師の物語を真似た、トルコ風の物語がいくつか挿入されていく。後にフランス・ロマン主義の作家ジェラルド・ド・ネルヴァルが『東方紀行』(一八五一年)において見せる、旅の体験とフィクションとを共存させるという手法をポトツキは先取りしているのである。このことによって彼の旅行記の文学的価値は大いに高められている。

最後に、ポトツキ自身の体験の独自性というのも彼の旅行記の大きな魅力のひとつである。ある時は、スペイン艦隊の艦砲射撃の砲弾が降り注ぐタンジェの町で平然とスケッチをし<sup>19)</sup>、またある時は、オラニエ公ウィレム五世に対する愛国派の蜂起が起こっている最中のオランダを見物する<sup>20)</sup>。とりわけ『アストラハン旅行記』(一八二七年、死後刊行)は興味深く、コーカサスで何騎ものコサック兵に守られながら数ヶ月にわたってステップ地帯を旅した経験が語られる。旅行者は、各地でこの地に住むさまざま

<sup>17)</sup> Potocki, *Voyage en Hollande* (1789), in *Œuvres*, éd. cit., vol. I, 2004, p. 68.

<sup>18)</sup> Potocki, *Voyage dans l'Empire de Maroc* (1792), *ibid.*, p. 99.

<sup>19)</sup> *Voyage dans l'Empire de Maroc*, *op. cit.*, p. 164.

<sup>20)</sup> *Voyage en Hollande*, *op. cit.*, p. 67-79.

な部族—トウルクメニスタン人、ノガイ族、キプチャク人、ツングース、ジュンガル、オスチア人、イングーシ人、チェチェン人—などの言語や風俗を記録し、また地図を作成する。悪天候や虫の襲来に悩まされ、夜には狼の唸り声を聞き、赤痢に効くと言われるミミズクの肉を煮て食べる。読み物として抜群に面白く、旅行記作家としてのポトツキの実力が窺われる<sup>21</sup>。

旅行記として残されたわけではないが、ポトツキがロシア政府が派遣する中国への使節団に加わった時の記録も興味深い。一八〇五年、彼はこの使節団に同行する学術グループのリーダーに任命される。まだ知らぬ東の大帝国を見聞する機会に恵まれたポトツキの喜びは大きい。三百人からなる大使節団は、いくつかのグループに分かれてサクトペテルブルクを出発し、イルクーツクで合流、その後バイカル湖を渡りキャフタへと向かう。だがこのあたりで、雲行きが怪しくなってくる。清朝政府は使節団の代表であるロシア大使ゴロフキンに対し、再三、国境を越える人数を減らすようにと通告してくるのである。ウルガ（ウランバートル）の王が仲介し、何度も北京との間で手紙のやり取りが行われる。時間だけが無駄に過ぎ、季節は厳しい冬へと向かっていく。ようやく国境を越えることが許され、使節団一行はウルガに到着する。だがここで再び問題が起こる。清朝政府は、ロシア大使に対し、中国皇帝（嘉慶帝）の前で三跪九叩頭の礼、すなわち九回ひざまづき、頭を地面にこすりつけることを要求するのである。大使はロシア皇帝アレクサンドル一世の名代として北京に赴くのであり、到底そのような屈辱的な挨拶をすることはできない。交渉は決裂し、使節団は北京に向かうことなく、その場で帰国の途につくのである。

ポトツキの嘆きは深い。くだらない外交上の見栄の張り合いから、大清帝国の首都を観察する貴重な機会をみすみす奪われてしまったのである。ポトツキはチャルトリスキに一件についての報告書を提出している<sup>22</sup>。そこには彼の怒りと絶望が見て取れるが、それは彼のこれまでの旅行記には

<sup>21</sup> *Voyage à Astrakan et sur la ligne du Caucase*, in *Œuvres*, éd. cit., vol. II, 2004, p. 13-209.

<sup>22</sup> 《Mémoire sur l'ambassade en Chine》(1806), *op. cit.*, p. 221-261.

見られなかった感情である。また旅先からポトツキはチャリトリスキに定期的に手紙を送り、現地の状況や、またロシアが今後この地で取るべき方策についての分析を報告している。だがこれらの手紙を果たしてチャルトリスキは読んだのであろうか。何しろまさにこの時期、ロシア帝国はオーストリア、英国などと第三次対仏大同盟を結んだばかりで、数週間後にはアウステルリッツの戦いでフランス軍に大敗を喫することになるからである。外務大臣は西側の戦況処理で手一杯で、到底、東側の情勢などに構う余裕はなかったはずである。

ポトツキはモンゴルで二ヶ月間にわたってゲルで生活した。越冬は厳しく、飲んでいる紅茶がソーサーにこぼれるとそれが直ちにシャーベット状になる。食事は日に一回、歯が立たないほどカチカチに凍った羊肉を食べる。水銀計が凍ることもしばしばだったという。このような試練を乗り越え、彼が実際に北京まで到達していれば、いかなる旅行記を残したかと考えると残念でならない。

## I—6 作家の最期

一七九九年、ヤンは大貴族スタニスワフ・フェリクス・ポトツキの娘コンスタンスと二度目の結婚をする。だが、その後コンスタンスは亡命フランス貴族の愛人となり、夫婦は離婚する。一八一二年にはナポレオン軍のモスクワ侵攻が失敗に終わり、輝かしきフランス皇帝の威光も地に落ちる。ポトツキはこの時期ほとんどウクライナから出ることはない。書簡を見る限り、おそらく憂鬱症に悩まされていた模様である。やがてナポレオンが失脚、ウィーン会議が騒々しく始まる。ひとつの時代がまさに終わりを告げようとしていた。

一八一五年十二月二十三日、ウクライナの自らの屋敷で、ヤン・ポトツキはピストル自殺を遂げる。理由は一切不明である。おそらくさまざまな事柄が絡み合っただけのことであろう。ロシア東洋アカデミーの長官に任命されるという夢は破れ、あれほど苦勞して執筆した歴史の著作についても期



待したほどの評価は得られない。家族はヨーロッパ中に散り散りになっている。孤独は深い。ポトツキはある箱のふたについていた鉛製の取っ手を、ナイフで苦労しながら削っていく。形を整える作業にはそれ相応の日数がかかったに違いない。ようやく仕上がると彼はそれをピストルに込め、自らの頭を撃ち抜く。後にロジェ・カイヨワはこの事件を次のように脚色している。

憂鬱の発作の合間に、彼は自分のティーポットのふたについていた銀の玉をやすりで磨いていく。一八一五年十一月二十日（ママ）、玉は望み通りの大きさに仕上がる。言い伝えによると、彼はあらかじめ領地の司祭に頼んで、その玉を祝福してもらっていたという（あざけりの身振りだったのか、神への歩み寄りだったのかはわからない）。彼はその玉をピストルの銃身に込め、自らの脳を吹き飛ばす<sup>23</sup>。

遺書の類は見つかっていない。ただポトツキの枕元には一枚の紙葉が置かれていた。そこにはしっかりした筆致で、奇妙な風刺画がいくつか描かれていたという。明らかに引き金を引く直前のポトツキが描いたもので、その風刺画こそが現場の惨状に増して、発見者たちの背筋を凍らせたという<sup>24</sup>。

## Ⅱ 『サラゴサ手稿』について

### Ⅱ—1 刊行までの経緯

『サラゴサ手稿』の執筆とその刊行をめぐるのは、きわめて複雑で興味深い経緯がある。この小説は著者の生前、完全な形で刊行されることはなかった。わずかに一八一三年とその翌年にパリのジッド書店から、それぞれ

<sup>23</sup> Roger Caillois, 《préface à *Manuscrit trouvé à Saragosse*》, Gallimard, Paris, 1958, p. 19-20.

<sup>24</sup> Voir Rosset et Triaire, *Jean Potocki, biographie*, op. cit., p. 456.

れ「アバドロ、スペインの物語」と「アルフォンス・ヴァン・ウォルデンの人生の十日間」という抜粋が匿名出版されただけにとどまる。ナポレオン戦争の混乱の最中、遠くウクライナにいたポトツキには、おそらくこれらの出版を知る由はなかった<sup>25</sup>。刊行された部数は少数だったが、反響は奇妙な形で現れる。何人かの文学者がポトツキの作品を剽窃し、中には裁判沙汰にまで発展するものもあるのである<sup>26</sup>。剽窃を行った者の中には、シャルル・ノディエやワシントン・アーヴィングの名も含まれている。

だがフランスではその後、ポトツキの名も『サラゴサ手稿』も完全に忘れ去られてしまう。その一方、一八四七年にはライブツィヒで『サラゴサ手稿』のポーランド語訳が刊行されている。翻訳を行ったのはエドムント・ホイェツキ<sup>27</sup>で、二年前からパリに亡命しており、シャルル・エドモンという筆名で劇作品を残している人物である。彼が底本に使った草稿はかなり質の高いものだと思われるが、これはその後見つかっていない。実は『サラゴサ手稿』の刊行をめぐるのは、この草稿の問題が常につきまとう。後に述べるように、ポトツキは二十年以上にわたってこの小説を書き続け、その間、何度も大きな修正を施している。そのため執筆時期の異なるさまざまな自筆原稿、秘書による写本、校正刷りなどが膨大に残されており、しかもそれらはヨーロッパ各地に散らばっている<sup>28</sup>。こうした一次資料を集めて比較検討し、そこからポトツキが想定していた最終的な小説の形を決定するのは極めて困難な作業となる。

一九六四年には、ポーランドの映画監督ヴォイチェフ・イエジ・ハス<sup>29</sup>がこのホイェツキのポーランド語訳を元に『サラゴサ手稿』の映画化を行っ

<sup>25</sup> ヤンの蔵書を相続した長男アルフレードの子孫が管理するワンツト（ポーランド南東部）の館の図書室の蔵書カタログに、これらの二つの本は含まれていない。Voir Maria Evelina Żółtowska, 《Le Manuscrit qui n' a pas été trouvé à Saragosse》, in *Le Topos du manuscrit trouvé*, éd. Jan Herman et Fernand Hallyn, Peeters, Louvain, 1999, p. 276.

<sup>26</sup> Voir *Jean Potocki, biographie*, op. cit., p. 464-465.

<sup>27</sup> Edmund Chojecki (1822-1899).

<sup>28</sup> 生涯を旅に送ったポトツキの軌跡を追うがごとく、『サラゴサ草稿』の一次資料はポーランド、ロシア、フランス、スペインなどに所蔵されている。

<sup>29</sup> Wojciech Jerzy Has, (1925-2000).

ている。白黒フィルムによるこの作品は、小説の持つ不可思議かつ皮肉めいた雰囲気をもよく再現し、現在でもカルト的な傑作という評判を得ている。一九九〇年代には、この映画に惚れ込んだマーティン・スコセッシとフランスシス・コッポラが私費でフィルムの修復と字幕つけを行っている。長らく日本では見ることはできなかったが、二〇一二年のポーランド映画祭で上映されると、大好評を博すことになり、アンコール上演が行われた後、DVDが発売される運びとなっている。

フランスでようやく小説の全体を読むことができるようになるのは、ポトツキの死から百七十年余り経った一九八九年になってからのことである。ホイェツキが翻訳に使った底本が見つからぬ中、さまざまな草稿を寄せ集めて何とか小説全体の形を復元しようと試みた版が刊行されたのである<sup>30</sup>。この版はその後、リーヴル・ド・ポッシュ文庫に入り、現在でも流通している。ただしこの版はさまざまな問題を抱えている。複数の草稿を突き合わせてもどうしても埋まらぬ空隙、また筋立てに残る矛盾を克服するために、この版では問題のある箇所をホイェツキによるポーランド語訳に頼り、それを重訳する形で補っているのである。その結果、小説は全部で六十六日を数えることになるが、これは最新の研究による六十一日を大きく超えている<sup>31</sup>。

実は一九五八年に、『サラゴサ手稿』の一部はロジェ・カイヨワによってすでにガリマール書店から刊行されている。カイヨワはこのとき、草稿の不完全な部分をポーランド語訳に頼るのではなく、あくまでポトツキの筆になることがわかっている箇所のみ、すなわち冒頭から第十四日目までを公開した。全体のおよそ四分の一ほどである<sup>32</sup>。大知識人カイヨワが自ら序文をつけて、これまた伝統あるガリマール書店から刊行されたこの版

<sup>30</sup> Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse*, éd. René Radrizzani, José Corti, Paris, 1989.

<sup>31</sup> 『サラゴサ手稿』は、主人公アルフォンス・ヴァン・ヴォルデンがスペインのシエラ・モレナ山脈をさまよった際につけていた日誌という体裁を取る。十日ごとにひとつの「デカメロン」としてまとめられている。

<sup>32</sup> 先述の、工藤幸雄氏による国書刊行会版が底本としたのはこの版である。

は大きな反響を呼び、『サラゴサ手稿』の文学的価値を決定づけることになる。その反面、この版が小説の評価・分類をミスリードしたというマイナス面も無視できない。というのもカイヨワが公開した箇所は、小説の中でもとりわけ幻想的な演出が施されている部分であり、それによってこの小説はカゾットの『恋する悪魔』やベックフォードの『ヴァテック』などと並ぶ、フランス語で書かれた幻想文学の先駆と見なされてしまうのである<sup>33</sup>。無論、小説全体を読めば、それがいかに偏った解釈かはすぐにわかる。

今世紀に入ってさらに大きな出来事が起こる。二〇〇二年にポトツキの故郷であるポーランドのポズナニで調査を行っていた二人の研究者が、あらたに六編の草稿を発見するのである。しかも、これらの草稿を子細に研究したところ驚くべき新事実が判明する。これまで『サラゴサ草稿』の物語の整合性、一貫性にはいくつかの解決できない問題が残り、研究者たちを悩ませてきた。だがこれらの問題は小説にはひとつの形しかないと考えるから生じるのであり、実は『サラゴサ草稿』には少なくとも二つの異なるバージョンが存在することが分かったのである。こうした仮説に立ち、新草稿の発見者であるフランソワ・ロセとドミニック・トリエールは、ベルギーの出版社から刊行された『ポトツキ全集』において、『サラゴサ草稿』に二分冊（一八〇四年版と一八一〇年版）を割いている。そしてこれらは後に、普及版のGF-フラマリオン文庫に二分冊のまま入ることになる。出版界の常識からは逸脱する、一作品に二刊本という形が取られたのはなぜか？ 後に述べるように、これらの二つのバージョンは作品構成からその雰囲気にとまるまで、全くの別物となっているからである。

<sup>33</sup> たとえばMarcel Schneider, *La Littérature fantastique en France*, Fayard, Paris, 1964やJean Fabre, *Idées sur le roman, de Madame de Lafayette au Marquis de Sade*, Klincksieck, Paris, 1979など。またトドロフやステンメッツもその幻想文学論で『サラゴサ草稿』を取り上げている。Tzvetan Todorov, *Introduction à la littérature fantastique*, Seuil, Paris, 1976 ; Jean-Luc Steinmetz, *La Littérature fantastique*, PUF, Coll. 《Que sais-je ?》, Paris, 1990.

## Ⅱ－２ 二つのバージョン

ポトツキはおそらく一七九一年ごろから『サラゴサ手稿』の執筆を始めている。この年、彼は小説の舞台ともなるスペインを旅し、さらに七月にはジブラルタル海峡を渡り、三ヶ月間をモロッコの地で過ごしている。キリスト教、イスラーム、ユダヤ教をめぐるある種の相対主義、どれかひとつの宗教だけが絶対的な価値を持つわけではないという考え方が『サラゴサ手稿』を支配するわけだが、その萌芽はこのあたりに求められるのかもしれない。

遅くとも一七九四年には、小説の一部が完成を見ている。ポトツキの残した書簡からは、『サラゴサ草稿』の進捗状況は一切わからない。彼は手紙ではこの小説については何も語っていないのである。その一方で彼には、年号が透かし入りされた特注の紙を使うという習慣があった。発注は少量で、手紙などを見る限り、紙はその年のうちに無くなるか、あるいは遅くとも翌年には全てが使い切られている。そのおかげで、それぞれの草稿の執筆時期についてはかなり正確に把握することができる。そして一七九四年の透かしが入った紙に書かれた、第十九日から第三十三日までの自筆原稿が残っているのである。これがいわゆる一七九四年版と言われる『サラゴサ手稿』の最初のバージョンである。前半部分が未発見であるばかりでなく、完成度も低いこのバージョンは通常『サラゴサ草稿』研究の対象からは外されることが多い。だがここで指摘しておきたいのは、この時点ですでに小説の基本的な設計は完成しているという点である。すなわち一日ごとの進行（「デカメロン」という表現はまだなされていない）、さまざまな物語が組み合わせられることで全体が支えられる構造、主要な登場人物などはすでに全て揃っているのである<sup>34</sup>。

一八〇五年、サンクトペテルスブルクにて小説の第一デカメロンが百部、

<sup>34</sup> このバージョンは以下で読むことができる。《La première version du *Manuscrit trouvé à Saragosse*, in *Jean Potocki à nouveau*, études réunies et présentées par Émilie Klene, Amsterdam, 2010, p. 323-431.

試し刷りされている<sup>35</sup>。この時点ですでに『サラゴサ手稿』というタイトルが見られる点には注意したい。最終バージョンとなる一八一〇年版には「前書き」(Avertissement)が付され、そこでナポレオン軍によるサラゴサ攻囲戦の最中、偶然フランス人将校によって紙の束が発見されることが述べられる。この紙の束こそが『サラゴサ手稿』そのものとなるわけで、小説のタイトルもこの逸話に由来する。だが実際にサラゴサの町がフランス軍によって包囲されるのは、一八〇八年と一八〇九年の二回に渡ってである。すなわちサンクトペテルブルクで試し刷りが行われた際には、まだ未来の出来事だったわけである。そこからこの小説のタイトルにまつわる謎が生まれることになる<sup>36</sup>。

一八〇四年から一八〇八年にかけて、ポトツキは小説を改変する作業を行う。第四デカメロンまでは順調に進むが、第五デカメロンの途中、第四十五日で突如、筆は止まる。そしてそのまま先を続けられることはなく、このバージョンは打ち捨てられてしまう。それが一八〇四年版と呼ばれるものである。この未刊のバージョンにはしかし言い知れない魅力がある。たとえばGF-フラマリオン版の序文には次のように書かれている。

一八〇四年版はこの小説の光の側面である。言葉のエネルギー、澁刺とした語り、題材の選び方やその扱いがここでは輝きを放っている。まるで手綱から放たれたかのように、言葉は次から次へと浮かび上がり、あたかも自然発生してくるかのようなのである。それはクライマックスまで続き、このクライマックスでまず登場人物たちが、次に作者自

<sup>35</sup> この試し刷りは、現在ではサンクトペテルブルクに一部、パリに一部が残されているのみである。一九九三年にパリで一部が競売に付されたが、その後行方がわからなくなっている。一九一〇年にはベルリンで一部所在が確認されているが、こちらもその後行方はわかっていない。

<sup>36</sup> この問題については次の論文を参照。François Rosset, 《Pourquoi Saragosse ?》, in *De Varsovie à Saragosse, Jean Potocki et son œuvre*, éd. François Rosset et Dominique Triaire, Peeters, Louvain, 2000, p. 189-202. また次の拙稿でもこの問題は詳しく論じられている。畑浩一郎「『サラゴサ草稿』研究序説」『仏語仏文学研究』東京大学フランス文学研究室、第43号、2011年、15-39頁。

身が、原始林と化したこの庭を前に不安を覚えることになる<sup>37</sup>。

このバージョンを読む読者はまるでジェットコースターに乗っているかのような感覚を覚えることになる。物語は次々に入れ替わり、お互いに絡みあっていく。時には入れ子状となって、語りの階層はどんどん下降する。十八世紀に流行したりベルタン小説顔負けのエロティックな描写がなされるかと思えば、啓蒙の時代にしても行き過ぎた反宗教的な言辭が発せられる。七〇〇ページを超える大部ではあるが、ページを繰る手は止まらない。

おそらくこの挑戦的な試みそのものが、ポトツキの筆を止めさせることになったのだろう。次々と増殖していく物語を前に、それらをひとつにまとめ上げ、結末へと導いていく自信を彼は失ってしまったのだろうか。あるいは複雑に絡み合った小説構造のせいで、読者がもはや物語の糸を追うことができなくなることを恐れたのであろうか。作中、登場人物のひとりである幾何学者ベラスケスは、読者が感じるであろう感想を次のように代弁している。

僕たちの首領が語る物語に注意を傾けていても意味がないよ。僕にはもう何が何だかさっぱり分からなくなってしまった。誰が語っているのか、また誰が聞いているのかまるで分からないよ。ここではバル・フロリダ侯爵が自分の物語を娘に語っているけど、その娘がジプシーに同じ話を語り、ジプシーが僕たちにそれを語っている。全くもってこんがらがっている。小説やこの種の他の著作は、年代記の概説のようにいくつもの行に分けて記述されなければならないといつも感じていたよ<sup>38</sup>。

<sup>37</sup> *Manuscrit trouvé à Saragosse (version de 1804)*, éd. François Rosset et Dominique Triaire, GF-Flammarion, Paris, 2008, p. 46.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 474. このベラスケスの台詞は、当然次の一八一〇年版では削除されることになる。

まるでこのベラスケスの不満を聞き入れるかのように、ポトツキはこの一八〇四年版を放棄し、全く新たな作品の構成に向かう。だが未完に終わったとはいえ、この一八〇四年版は、『サラゴサ草稿』という屏風絵の見事に独立した一面であることは間違いない。

一八〇九年から一八一四年にかけて、あるいはポトツキの死の直前である一八一五年にいたるまで、小説には絶えず改変が施される。これは単なる書き換えといった規模のものではなく、すでに書かれた物語をいったん全て解体し、それらを新たな設計図のもとに組み直していくという大がかりな作業となる。これが『サラゴサ手稿』の最終形となる一八一〇年版と呼ばれるものである。この版においては、小説中最大の謎となる「ゴメレス一族の秘密」をはじめ、作品内に張りめぐらされていた数々の伏線が回収され、第六十一日において物語はついに大団円を迎えている。

この改変の過程でまず指摘すべきなのは、先行する一七九四年版、一八〇四年版では大きな位置を占めていた「さまよえるユダヤ人の物語」が、一八一〇年版では完全に削除されていることである。一八〇四年版、とりわけその第四デカメロンでは、この「さまよえるユダヤ人の物語」と、もうひとつのパズルの重要なピースである「ジプシーの首領の物語」とがひとつの日 (journée) の中に収められ、それが交互に語られるという構造を取っていた。プトレマイオス朝時代末期の古代エジプトを舞台にした神秘的な装いの「さまよえるユダヤ人の物語」と、十八世紀初頭のマドリッドで繰り広げられる陽気な恋愛騒動である「ジプシーの首領の物語」とが代わる代わる語られることで、一八〇四年版には独特の目の回るようなリズムが生まれていた。

ところが「さまよえるユダヤ人の物語」が削除されたことによって、一八一〇年版では、「ジプシーの首領の物語」の主人公であるアバドロが大きく前面に出ることになり、その存在感は小説全体の主人公アルフォンスをはるかに凌ぐまでになっている。また複数の物語が交互に語られるというこれまでの構造は原則として改められ、一八一〇年版ではひとつの物



語が中断を挟みながらも、連続して語られていく。ある研究者はこの変化を音楽用語を用いて「対位法からセリエル音楽への転換」と称している<sup>39</sup>。実際、同じ素材（物語）を扱いながらも、一八〇四年版と一八一〇年版とでは奏でられる音楽は全く異なったものとなっている。

さらに一八一〇年版ではさまざまな箇所修正が施されているが、その向かう方向は同一である。すなわち小説を結末に導くべく、物語の展開に関係ない脱線部分は一貫して削除されていくのである。その結果、一八〇四年版に見られていた興味深い登場人物同士の会話などもほとんどが消滅している。また先述の通り、一八〇四年版の特徴であったエロティックな描写や反宗教的言辞は丸々削除されるか、あるいはより穏やかな形に書き換えられている。ひとつだけ例をとると、第一デカメロンの第二日において、若者パシェコを自分の妹イジネラと結びつけようとするカミラのセリフは、一八〇四年版では次のようになっている。

あなたはイネジラを愛されますが、私もあなたを愛するのです。私たち三人のうち二人だけが幸せになって、もう一人が放っておかれるなどということがあってはなりません。今夜、私たちは同じひとつの寝台を使うことになるのです。おいでなさい…<sup>40</sup>。

ここでは明白にグループセックス、しかもカミラとイジネラは姉妹であるため、近親姦姦の要素まで見てとることができる。だがこの場面は一八一〇年版では次のように書き換えられることになる。

あなたはイネジラを愛されますが、私もあなたを愛するのです。私もあなたたちと一体になりたいのです。あなたたちを二人だけにしておく決心がつかえません。ですからあなたたちの元を離れません。おいで

<sup>39</sup> François Rosset et Dominique Triaire, 《Genèse du roman》, in *Œuvres*, éd. cit., vol. IV-1, 2006, p. 17.

<sup>40</sup> *Manuscrit trouvé à Saragosse (version de 1804)*, éd. cit. (GF-Flammarion), p. 94.

畑 浩一郎

なさい…<sup>41</sup>。

性的倒錯の印象は大幅に弱められているのがわかる。このような書き換えがなされた理由は不明である。研究者たちはさまざまな観点から推測を行っているが<sup>42</sup>、ひとつ考えられるのは検閲の問題である。ナポレオン軍の進撃によってヨーロッパ中が大混乱に陥っているこの時期、印刷物への検閲はこれまで以上に厳しいものとなっていた。ただもしポトツキが検閲を恐れたとしても、それはパリにおいて発禁処分になるということではなく、むしろサンクトペテルブルクで悪評が立つことに対してであったであろう。この時期ポトツキは相変わらず、ロシア政府において重要な役職に就くことを夢見ていたからである。

## 終わりに

ポトツキ、あるいはこの時代のポーランドの大貴族たちのアイデンティティのあり方は複雑である。いずれも幼少期にフランス語による教育を受け、フランス語を第一言語として成長していく。ポトツキは、弟のセヴランをはじめ、極めて近い親戚に宛てた手紙をもフランス語で書いている。またロシア政府に仕えるようになってからは、外務大臣ブドベルクを筆頭に、官僚たちとのやりとりもフランス語を通じて行い、果てはロシア皇帝アレクサンドル一世宛の手紙もフランス語で書かれている。その一方で、ポーランド語で書かれた手紙もわずかに残されているが、いずれも文章のレベルは劣悪で、明らかに執筆に苦労した跡が見受けられる。言語の面では、ポトツキはほぼフランス人と同様と言ってよい。

その一方で、祖国ポーランドの危機が訪れると、ポトツキはそれまで着

<sup>41</sup> *Manuscrit trouvé à Saragosse (version de 1810)*, éd. cit. (GF-Flammarion), p. 93.

<sup>42</sup> 例えば以下を参照。François Rosset et Dominique Triaire, 《Présentation》, *Œuvres*, éd. cit., vol. IV-1, p. 7-9.

ていたフランス風の衣装を敢然と脱ぎ捨て、父祖伝来の衣服を身につけると、熱烈な愛国者として振舞うようになる。檄文を次々に執筆し、若い貴族たちを鼓舞する。だが晩年のポトツキは、こうした振舞いを苦々しさとともに思い出すことになる。「ポーランドではいつもこうだった。愛国心というのは、それぞれの世代が感染する病なんだ。僕はこの伝染病の真っ只中で生まれた。それが僕の父たちを破滅させた。それから僕が破滅した。それから次の世代の破滅を見ることになる<sup>43</sup>。」第二回ポーランド分割以降、ポトツキは「ポーランド人」という意識を完全に捨て去る。そしてエカチェリーナ二世のことを「われらが君主」(notre souveraine)と呼び<sup>44</sup>、ロシア臣民として生きることを選ぶ。繰り返すが、ロシア語はほとんど話せないにもかかわらずである。

そのような複雑な背景を背負ったポトツキが残した唯一の小説『サラゴサ手稿』が、多様な世界観を提示するのはまた必然である。物語の舞台となるのはスペインのシエラ・モレナ山脈だが、その独特の作品構造のおかげで、読者はフランス、イタリア、シチリア、マルタ島、オーストリア、フランドル、モロッコ、エジプトといった地中海沿岸全域に加え、ときには大西洋を超え、ヌエバ・エスパーニャ副王領にまで運ばれる。キリスト教、イスラーム、ユダヤ教の歴史と教義をめぐる考察を通して、人類の始原にいたる道が示され、さらにそれと並行する形で、古代フェニキア、古代エジプト、古代ギリシアの秘された神秘・秘儀が明かされる。

さまざまな物語が林立するこの小説の根元を貫く一本の糸は、ゴメレス一族の秘密である。スペインに古くから住む彼らはもともとムスリムだが、レコンキスタの際に、その一部はキリスト教に改宗して地下に潜り、また別の一部はイベリア半島からアフリカに逃れ、イスラームの教えを守って

<sup>43</sup> Lettre à Maria Potocka du 10/22 octobre (1809), in *Œuvres*, éd. cit., vol. V, p. 232. 一九一八年にレーニンによってグレゴリオ暦が採用されるまでは、ロシアではユリウス暦が使われていた。この手紙にはふたつの日付が記されているが、前者がグレゴリオ暦、後者がユリウス暦となる。

<sup>44</sup> Lettre à Platon Alex. Zoubov du 10 juillet 1796, *ibid.*, p. 47.

いる。主人公アルフォンスは、ゴメレス一族があちこちにはりめぐらせた試練をひとつひとつ乗り越え、最後にこの一族の秘密に達する。アルフォンスの身を通して、キリスト教徒のゴメレスとムスリムのゴメレスとが一体となるところでこの小説は大団円を迎える。

『サラゴサ手稿』の一八一〇年版はこうして見事に完結するわけだが、その反面、失ったものも多い。とりわけ一七九四年版、一八〇四年版において、あれほどの魅力をたたえていた「さまよえるユダヤ人の物語」がすっかり削除されているのは、いかにも残念である。通常、さまよえるユダヤ人、別名アースヴェリユスとは、十字架を背負ってゴルゴタの丘に登るイエスキリストを侮辱した廉で、最後の審判の日まで地上を彷徨い歩く運命を担わされた人物のことを指す。不死となり、故郷と安息を失ったこのユダヤ人の伝説は、多くの文学者や画家によって取り上げられている<sup>45</sup>。通常芸術家たちが描き出すのは、さまよえるユダヤ人がイエスを侮辱した後の放浪の経緯となるが、ポトツキの独自性はむしろその少年時代を語ることにある。共和制末期のローマの政情、古代エジプトの信仰の秘儀、そして何よりも少年アースヴェリユスとゲルマヌスの友情など、ポトツキの語る「さまよえるユダヤ人の物語」は、実にみずみずしい魅力に満ちている。

ポトツキの生涯と、彼の残した小説とを比べてみると、互いに相反するベクトルが作用していることがわかる。ポーランドというヨーロッパの東部に生をもうけたポトツキは、その後ロシア皇帝に仕え、この大国が今後コーカサスやシベリアに向けてどのように勢力を伸ばしていくかについて常に考えをめぐらせている。彼の目は間違いなく、遠く北京にまで達している。だからこそ、ロシア政府の中国使節団がウランバートルで道半ばにして引き返したとき、あれほどの怒りと絶望をあらわにしたのである。その一方で、『サラゴサ手稿』の主な舞台となるのはスペインのシエラ・モ

<sup>45</sup> 「さまよえるユダヤ人」の伝説は、中世のドイツに起源を持ち、以降ヨーロッパ各地に民間伝承として広がった。このテーマを取り上げた芸術家はゲーテからアポリネールまで、ギュスターヴ・モローからシャガールまで枚挙に遑が無い。とりわけ十九世紀半ばのフランスで新聞に掲載されたウジェーヌ・シューの小説は、この世紀最大の成功作のひとつに数えられる。

レナ山脈であり、ヨーロッパの西部となる。物語は地中海全域に及ぶが、時として大西洋を渡り、新大陸アメリカにまで達する。つまりポトツキの生涯においては東へ東へ向かう力が、小説世界においては西へ西へ向かう力が働いているのである。そして、このふたつの力の起点となるのは、いずれもポトツキの故郷ポドリアである。彼の生涯と作品の独自性は、やはりこの土地に由来しているのである。

